

【論文】

経済システムとしての江戸城

大口 勇次郎*

目次

1. はじめに
2. 「経済制度としての宮廷」
3. 将軍の食生活
4. 4つの報告の前に

キーワード 江戸城の経済 徳川の家計 将軍の食事

1. はじめに

本日のシンポジウムは「江戸城の経営と消費」というテーマを掲げている。あまり聞きなれないタイトルであると思うので、まず何故このようなテーマを選んだのかという点から説明をしたい。

これまで江戸城というと、幕藩権力の中枢である徳川幕府が国家の政治・行政を執行する場所であり、あるいは将軍が大名たちに主従の関係を明らかにする「儀礼」の場として捉えられてきた。言い換えれば権力の象徴を示す公的な建造物として歴史研究の対象とされてきたといえよう。

これに対して、われわれの試みは、江戸城でおこなわれる政治や儀礼を支えている多くの人々の活動や生活に焦点を当てていこうとするものである。まずそのための前提として、江戸城にはどんな人々がいたのだろうか。江戸城の夜間人口は何人いて、江戸城に通勤してくる人を含めた昼間の人口はいかほどかとも知りたいと思う。例えば、将軍とその家族が、江戸城大奥に居住していたことはよく知られており、これまでも古くは好事家によって、最近では女性史の立場からの研究が進められているものの、では大奥女中たちの労働市場がどのようなものであり、彼女たちの食料や衣料の供給システムはどうなっているのかという点などはほとんど分かっていない。老中以下の幕閣の要人たちの江戸城への出勤状況、執務状況、あるいは毎日の食事の慣行なども不明な点が多い。ましてその下で、行政や会合の事務を執ったり、儀礼の下働きを担当したりして、将軍家族や幕閣要人の活動を支えている多くの御家人以下の人々については、

*お茶の水女子大学名誉教授

研究のメスが入ってこなかったのである。

われわれは、大奥で将軍家族の生活に奉仕する人々、江戸城の周囲を警護したり、建造物の保守点検に従事する人々、表の座敷で政治や儀礼の場を支えている人々の生活を視野に入れて、江戸城という巨大な館に関わって生きている人々の消費や生産、流通や労働の仕組みを明らかにして、ひろい意味での江戸城をめぐる経済と経営の全体を明らかにしようとするものである。

このように江戸城という巨大な館を維持し経営していく人々の関係を明らかにしようとしたり、将軍家族の生活と再生産を維持する消費物資のあり方や、それを賄う市場流通を明らかにしようすると、その周辺の研究はほとんど未開拓であることに気付かざるをえない。その場合、検討の範囲は江戸城の外にも広がっていく。江戸城の周囲を取りまく城下には、御家人・旗本・大名たちの住まいがあり、江戸城の普請・修復を担当する出入りの職人たちが住み、日常必須の食材・衣服・日用品を提供する市場や商人たちの店がある。さらに物資の交流や人々の移動・交流を考えると、研究の対象は近郊の農村から、全国の各地域にも及んでいくであろう。

本シンポジウムは、これまでブラック・ボックスの状態になっていたこの江戸城をめぐる経済に照明を当てていきたいと思っている。その方法についても手さぐり状態なのであるが、ここでは取りあえず「モノ」と「ヒト」という二つの視点から検討することとし、4本の報告を用意したのである。

報告を用意している4人のメンバーは、独立して研究をすすめるなかで、各人がそれぞれ江戸城を核にした総合研究の必要性を感じてきた点は共通している。報告に入る前に、このような問題意識を持つにいたった契機の一つの例として、私の場合をお話してみたいと思う。一般的な説明よりも、多少具体的なケースをお話したほうが理解を得やすいと思われるからである。

2. 「経済制度としての宮廷」

1998年にマドリードで開催された国際経済史学会大会において、「経済制度としての宮廷」というテーマのシンポジウムが用意されたことがあった。これは、ヨーロッパを中心とした各国で、産業革命以前に存在した宮廷の経済制度を比較史の方法で明らかにしようとする、フランスのエイマード教授の発案による試みであった。準備会の報告を含めると、フランスを始め、イタリア、スペイン、オランダ、スウェーデンのヨーロッパ各国、アジアではトルコ、日本の事例が取り上げられた。たまたま日本について私が依頼され、準備会と本大会で報告する機会を与えられたことがあった。

宮廷と一口でいっても、その国と時代によって、成立の事情、置かれた環境、経済発展の段階の違い、伝統的な文化など、さまざまな違いがあることは言うまでもないが、そのことを前提とした上で、それぞれの宮廷を分析する際の武器として、次のような共通の指標が求められ

た。

- (1)経済的・財政的組織
- (2)会計と経営のシステム
- (3)消費と供給のモデル
- (4)再分配の機能
- (5)都市との関係
- (6)宮廷と労働市場

異なる国における経済体について、上記のような共通の項目を指標として比較していこうとするものであった。会議そのものは、フィレンツェの準備会を経て、マドリードの大会において盛況のうちに行われ、初めての試みとしては一応の成果は上がったものといえよう。準備会における報告を基にした論文集も刊行されているので、詳細についてはその報告集に譲ることとして、ここでは私がこの国際会議の報告を準備した際に気の付いた点を述べてみることにしたい。¹⁾

国際学会における私の報告は、日本の「宮廷」という与えられたテーマに対して、自分の専門分野である江戸時代の徳川将軍家と江戸城を対象として課題に取り組んだのであるが、その際に内容にはいる以前に二つの難題があった。

一つは、ヨーロッパの研究者に対してヨーロッパの宮廷と比較することを前提に、日本の江戸時代の政治と経済に関する特性として前もって幾つかの事情を説明する必要があったことである。即ち、

- ①朝廷と徳川幕府との二重権力の構造
- ②士農工商の身分制
- ③新開地に設置された江戸城
- ④オランダや朝鮮など一部の国だけに開かれた鎖国制

等々、近世日本の成立期の事情も踏まえて、どうしても説明しなければならないことがあった。これらのことは、今後もグローバルな比較史を試みる以上は避けて通ることの出来ない問題であらう。

もう一つは、徳川「宮廷」の家産や家計を論じようとしたときに、困難を感じたことがある。私自身をふくめて、これまで近世史の分野で徳川幕府の財政について分析してきた研究の多くは、実は幕藩体制という近世国家の財政であって、この会議の主題である「宮廷」経済の家計はその一部分にすぎない。徳川幕府の史料によれば、近世幕藩体制国家の歳入、歳出とその変遷についてはかなり分かるのだけれども、徳川将軍家の家計については、その大枠が分かるだけであって、細部についてはほとんど分かっていない。

表1には、データが残る1729年、1843年、1863年の幕府財政の総額と、その内から家計的な性格の強い「奥向経費（奥方合力など大奥の支出）」と「八ヶ所経費（江戸城の納戸、西丸納戸、

[表1] 幕府財政における「宮廷」関係の支出経費

(単位:千両)

	享保14年 (1729)	天保14年 (1843)	文久3年 (1863)
総支出	731.2	1,445.4	5,006.2
〈総支出の内〉			
奥向経費	60.4(8.3%)	91.9(6.4%)	122.2(2.4%)
八ヶ所経費	84.0(11.5%)	203.0(14.0%)	248.4(4.9%)
〈八ヶ所経費の内〉			
納戸方	27.8	83.8	137.1
西丸納戸方	4.2	27.9	—
作事方	7.3	5.6	4.6
小普請方	9.2	9.3	9.9
賄方	21.2	36.3	13.2
材木方	1.1	1.8	1.5
細工方	4.2	6.3	3.2
畳方	3.8	3.4	2.4

※銀表示は金に換算した(銀60匁=金1両)。

作事、小普請、賄、材木、細工、畳など八つの担当役所の支出²⁾」を掲げた。そもそも幕府財政から、国家的支出と將軍家の家計支出を分別することは難しいが、ここでは大奥の経費と江戸城内廷の機能維持のための経費というほどの意味で「八ヶ所」の役所の経費をもって、「宮廷」費用に当たるものとみなしてみた。これによると1729年から1843年までの「宮廷」費の実額は2倍強となっており、特に本丸と西丸の納戸方経費の増大が著しい。1843年と1863年を比較すると、この間に支出総額が3倍以上に膨張したのに対し「宮廷」費は2割増しに止まっていることが分かる。内訳については、奥向に関しては奥方、姫など人別の支出額、八ヶ所に関しては、各役所ごとの支出総額がわかる他は、別口の臨時的支出の費目が知れるだけで、支出の詳細な用途についてこれ以上明らかにすることが出来ない。

国際経済史学会で要求された徳川家の家計を明らかにするには、これまでとはまた別の視点が必要であり、新しい史料の探索も必要だということであろう。学会で報告しながらも、將軍家族の支出、江戸城の消費等については、自分で納得して国際比較できるデータを示すことが出来ないもどかしさを感じ、この分野の研究が今後の課題であることを痛感した。このような経験から、いつか改めて経済史の視点によって日本の「宮廷」について検討する機会を持ちたいと考え、具体的には幕府の財政経済から家産・家計の部分を取り出して、江戸城の私的分野にメスを入れたいと願うようになった。その数年後には江戸城における將軍の食事を主題にした論文を書く機会があったが、その時はまだ明確な分析方法を持っていない状況のまま取り組んでいるので、その時の経験も次に記しておきたい。

3. 将軍の食生活

「消費者としての江戸城」と題して、江戸城における将軍の食事を中心に検討する機会があった。³⁾江戸後期における江戸城の献立と思われる史料をもとにして、⁴⁾食材の流通市場、江戸城における食材の購入、賄所における調理、これらを統括する職制、将軍の食事の慣行などについて整理してみたものである。

このようなテーマは、先行研究もあまりなく、分からないことが多かった。そもそも将軍の食事摂取の慣行については、同時代の記録もなく、明治期に行われた担当の役人からの聞き取りに頼ることになる。⁵⁾また江戸城における食材の購入や調理について考えると、まずは幕府の職制のなかには御賄所、御台所などの役所があり、江戸城の絵図にはその場所も特定することができる。⁶⁾賄所は江戸城で扱う食料品と日用雑貨を購入する部署といわれ、ここには全体を統括する賄頭の下に百人をこす人員が定員化されている。この膨大な人数は、いったい物資購入にどのように関わっていたのであろうか。消費市場の見回り、物資の運搬、帳簿の記帳などを、彼らが担っていたのであろうか。その辺のことはよく分かっていないのである。

また、台所は、江戸城内で供する食事のために、食材の調理を担当したことになっているが、では江戸城・表において食物を支給するのはどのような場合だったのだろうか。正月や節句などの儀式日に大名たちに膳を出すことはあったであろうが、平常に勤務する大名や旗本たちに昼食を給することがあったのであろうか。門番などの警備役の勤番にも台所の食事が供されたのであろうか。この辺りは、なかなか文献史料では見つけることが難しかった。

将軍の食卓を賑わす食材については、特に魚類が豊富であった。江戸城に納入される魚介類については、家康の時代に江戸内湾に御菜八ヶ浦を設定して、定期的な上納のシステムを作ったこと、18世紀以降は魚問屋のうちで有力なものが御用請負人として上納を請け負っていたが、さらに幕末には幕府の直買制へ移行したことなどは、従来から明らかにされてきた。これらの江戸城の魚需要と、江戸町人の魚需要や魚市場とどのような関連にあるのか、また上納の範囲にある相模や房総方面の漁獲や江戸回送との関係などについても、まだ解明すべき事柄が多いようである。この辺りは、本日報告の太田氏の研究から教えられることが多かった。

そもそも江戸城で買い上げる食材の分量はいかほどであり、またその代価はどれほどであり、その対価は上納制に基づく無償なのか、市場の値段に応じたものなのかについても、幾つかの伝聞史料が伝えられているものの、勘定帳や帳簿、あるいは受取証文などの文字史料で確認することが極めて困難なのである。

このように「将軍の食事」というような江戸城に関わる小さなテーマを取り上げようとしても、将軍家族の食生活の習慣、賄いに関する幕府の複雑な職制、江戸の商品市場と江戸城の購入システム、特別な食材の生産と流通など、幾つもの明らかにしなくてはならないネックにぶつかるのである。

4. 4つの報告の前に

本日の4人の報告者は、これまで各々の研究のなかで江戸城との接点を持っており、無意識のうちに共同研究の必要性を感じていたといえよう。報告者の一人である江戸東京博物館の市川寛明氏が、各人の仕事を吟味・調整して、シンポジウムの開催を呼びかけたところ、直ちに応じる用意があったのである。とはいえ、この4本の報告は、それぞれ独立した研究であって、必ずしも互いに関連しあっているわけではない。そこで前もって、4本の論文の論点に若干のコメントを加え、その位置づけを試みておこう。

4本の論文の内、前半の2本は江戸城の中で流通する「モノ」、あるいは江戸城に流入する「モノ」を扱っている。「モノ」の流通には、「カネ」の裏付けを伴う市場経済に則った関係と、貢納や下賜といった経済外的な要素によるものが混在しているのが特徴である。この点に注意して2本の報告を聞いてみたい。

松尾報告は、御用取次見習役の記した帳簿の分析である。この帳簿は、奥向きの諸役人から提出されたカネとモノの出入りに関わるさまざまな書類を役目柄書き留めたものであるという。この中には買上げや献上によって調達された將軍の衣装だとか、將軍から周辺の家族・女中・侍臣たちへ手当や褒美として下賜される衣料などについても細かく記帳されているという。この種の史料が紹介されることはおそらくはじめてで、これまでの幕府財政の枠で言えば、総支出のうち家産的な部署である「八ヶ所」と総称された中の「納戸方」経費として括られた内訳の一部であろう。経費の総額を知ることは出来ないが、將軍周辺のプライベートなカネやモノの流れを実際に知ることが出来る材料である。納戸方の仕事については、これまでは、明治期に行われた聞き取り調査によって、わずかに窺うことが出来るものであったから、たとえその一部であっても、このような帳簿の分析は貴重なものといえよう。

太田報告は、江戸城における消費物資調達の経路を明らかにしている。これまで個別的に知られていた情報を総合的に整理し、本年貢の他に、貢納・調達される物資と、市場経済を通じて購入した物資とを対比している。貢納物は、それぞれ異なる由緒を持っているし、購入物資についても、完全に市場経済を経由したとも言えず、特別に安い値段であるとか、御用達商人の独占などの経済外的関係を内包している。江戸城の儀礼に必要な物資として、特に鯛の調達システムについて検討されているが、この点は、私も前掲の將軍の食膳を検討した際に参照させていただいた研究である。

このような領主経済における消費物資の購入に関する研究としては、大名家の江戸藩邸の台所における物資の調達について分析した研究があるが⁷⁾、江戸城の消費需要についてはまだ未開拓である。

つぎに、江戸城にかかわる「ヒト」についての報告である。

江戸城に関係する人々と言われても、その範囲が難しい。例えば「吹塵録」にあるデータに

よると、享保7年の調べで、万石以上（大名）264人、万石以下（旗本）5,205人、御目見え以下（御家人）17,399人、御扶持を下され候職人・町人・幸若・猿楽共488人という数字が残っている⁸⁾。これは、あくまでも幕府が扶持を与えた武士身分とそれに準じた者たちのデータである。従来、江戸城の仕事といえば、行政・儀礼を維持するという観点から、大番、書院番、小姓組番、新番、小十人組番などの番方と呼ばれた警備部門の旗本・御家人と、老中、若年寄、目付、勘定、小姓、右筆などの役方と呼ばれた管理部門・行政部門の武士がいたことはよく知られている。

さらに徳川幕府を下から支え、江戸城という巨大な館を維持するためには、上記のほかにもさまざまな労務を提供している人々がいたのである。仮に仕事の種類からすると次のような分類が可能であろう。

- (1) 将軍とその家族に奉仕する大奥女中
- (2) 賄所、表台所に属して物資の購入や食材の調理を職務とする人
- (3) 江戸城施設の普請や補修にあたる大工・職人
- (4) 城門や建物周囲の警備や、保守・清掃などの雑役にあたる人
- (5) 奥医者、能役者、絵師、などの文化的技能の提供者

本日の報告は、このなかで主に(3)(4)に関わる仕事についての報告である。

先ず市川報告は、江戸城の門番という職務について取り上げる。門番は、江戸城出入りの関門に居て、城全体の安全を守る警備役であると同時に、大名登城のとき行列を受け入れる際の儀礼を維持する役目を担っていたという。この仕事は、幕府から譜代藩に対しての役として命ぜられるのが一般であったが、報告では安政年間に桑名藩に命ぜられた大手門の勤番を江戸の人宿（労働斡旋所）が請け負って、その労働力によって門番業務が維持されたことを明らかにしている。その上で、市川報告は請負の実態と請負にともなう人宿の収支分析を行っている。

田原報告は、江戸城の内部において、警備や土砂の運搬など、日常的に城を維持していくために必要な、いわゆる下働きを担っていた五役の者（小人、黒鉄者など）に焦点を当てている。報告の中心は、これらの仕事のための人員調達の仕組みである。

江戸城の下働きの人々の雇用については、なかなか複雑な関係があるので、これまで知られている範囲で雇用の形態を整理しておこう。ここでは理解を容易にするために、現代的な観点から分類してみたので、あるいは江戸時代における人間関係からすれば修正を要するかもしれないが、敢えて分類してみた。

- ① 世襲的な家禄や扶持を得ている武士身分
- ② 一代限りの終身雇用
- ③ 有期の雇用（年季奉公など）
- ④ 臨時の雇用（日雇など）

いくつか例を挙げておくと、大奥の女中は、中臈以上の上級職は②の終身雇用であるが、そ

れ以下は十年もしくは数年の年季奉公である③。

市川報告の門番は、③有期の雇用ということになろうが、人宿の請負で集められたもので現代風にいえば「派遣」による労働力である。

田原報告の五役は、たぶん②一代限りの終身雇用が多いと思われるが、複雑な雇用関係自体が報告の主題なので、さらに注目しておきたい。

最近の研究動向としては、士農工商の身分の枠から外れた人々を「身分的周縁」という枠組みで研究する手法が注目されているが、ここでのわれわれの関心は、権力中枢の所在する江戸城に、さまざまな身分、さまざまな雇用関係にある人々が存在していることに注目し、かれらを正当に位置づける視角を持ちたいということである。

以上、4本の報告は、それぞれ独自の新しい視点から江戸城の内部について検討を加えたものである。報告相互の関連はこれからの課題であり、これらを発展させた江戸城の総合研究が将来期待される場所である。少なくとも今回のシンポジウムによって、これまで「ブラック・ボックス」であった江戸城の内部に、いささかでも光を当てることが出来れば幸いである。

【注】

- 1) Yûjirô Oguchi, "The Tokugawa shôgun's "court" as an economic institution", *La cour comme institution économique* (Éditions de la Maison des sciences de l'homme, Paris, 1998)
- 2) 大口勇次郎「天保期の幕府財政」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』22巻2号、1969)。大口「文久期の幕府財政」(『幕末・維新の日本』山川出版社、1981)。
- 3) 大口勇次郎「消費者としての江戸城－將軍御膳の魚料理－」(『お茶の水史学』45号、2001)。大口「江戸城の台所」(『東京人』236号、2007)も参照。
- 4) 史料は「柳営年中食次冊」(国会図書館蔵)。史料紹介として、高正晴子・山下光雄「將軍の献立について」(『梅花短期大学研究紀要』40号、1992)がある。
- 5) 『旧事諮問録(上)』(岩波文庫、1986)など。
- 6) 深井雅海『江戸城を読む』(原書房、1997)。
- 7) 岩淵令治『江戸武家地の研究』(塙書房、2004)。
- 8) 「吹塵録 人口及び国高之部」(改造社版『海舟全集』一卷、勁草書房版『勝海舟全集』六巻、など)。
- 9) 『シリーズ近世の身分的周縁 全6巻』(吉川弘文館、2002)。